
青い心

そくと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い心

【Nコード】

N1658BA

【作者名】

そくと

【あらすじ】

誰も忘れられない恋をするもの、人生の試練を乗り越え、まだ未熟な高校生が大人になっていく1つの物語。

いつもの朝

口から白い息がでる、寒さもいよいよ本番か。
7時36分それが毎朝乗る通学電車だ。

「またみてんのかよ。」

「うん？」

ダメだイヤホンに埋まった耳は甘い声をだすアニメで夢中だった。

「まさとおー。」

耳からイヤホンを引つ張りだしてやった。

「うわっ、いいとこだったのに！！うっ今日さみいな。」

「今更気づいたのかよ、お前にとってアニメって暖房効果もあんだな。」

「知らないの晴也君？アニメは人類が開発した万能薬なんだよ。」

「真人、ヤバイぞやっぱりオタクはいつてる。」

真人にオタクはいつてるって言うて決まってるって言う。

「まだ俺はアニメ好きの域だよ。」

って、誇らしげにいつてるが誇らしい欠片もない。

「晴也見るよ、またあいつらだ。」

またニヤニヤしてる、これは何か起こす前兆だった。

矛先には騒いでるオタクがいる、明らかに高校生には見えない、完全に制服きたオッサンだ。

「うるせえよ、だから嫌いなんだよバカ高の生徒はよお。」

まるでビデオの停止ボタンを押したみたいにピタッと静かになった。

「あははは、真人やるな。」

「仕方ねえよ、駅の平和を守らないとよ。」

“四番線に電車が参ります、黄色の線からお下がりになってお待ち

ち下さい”

電車はきまって満員でやって来るが、この駅で大半が下車をする。

毎日同じ事を繰り返す、そうすると色々な事が見えてくるものだ、例えばいま目の前に座っている30代ぐらいのサラリーマンはいつも端の席で口を開けて寝ている、そうすると「ねえまただよ。」って言いながら女子高生が笑っているのだ。

そんなにくだらな事でも、毎日目の前で起きると自然に“またやってる”という言葉が心に浮かぶのである。

「今日も練習で遅いの？」

真人は野球部で学校が遠い分帰りも遅かった。

「そうだよ、全く練習っていうより、無賃労働だよ、晴也はいいよなバイトできて。」

「給料入ったら一箱買ってやってんじゃん。」

「ああほんとありがたやー」

中学から俺の周りの友達も俺もタバコを吸っていた、かつこいいという勘違いから始まった物であり、今じゃ必需品となっていた。

“次はあ小田原、小田原です”

「じゃあ、練習おわったら連絡して。」

「もちのろんだよ。」

改札にSuicaをかざす、小田急は11分、10分ぐらい時間が空くのは冬は最悪に寒い時間だ。

「よっ。」

突然肩を叩かれた。

「おっ洋か。」

「菅は？」

「知らねえよ、またおそいんだべ。」

俺には学校に2人しか友達がない、つまりその一人である、そしてこの11分と帰りの52分が一番楽しいという学校ライフだった。

高校になってから良いことなんて無い気がする、そもそも高校自体おもしろいものではなかった、それでも光が差した4ヶ月間があった。

彼女

あれは去年ことだ。

夏休みに入り、学校終え浮かれながら菅と帰っていた平塚に着きシユワクチャになったソフトの箱から右にシユワを寄せたタバコを口にくわえ、固くなったライター強く押し、火をつけた。

駅から300メートルほど離れた、林に足を運ばせたのは、なぜか“彼女”に会えるそんな気がしたからだ、というのもそこが彼女の家の目の前だからであった。

斜めを向いた松の木に腰をかけ、菅と話しながらも多少は周りを気にしていた。きっと菅は制服だし人のいないところで一服するため林に来たのだろうと思っていただろう。

またタバコに火をつける、そんな時に“彼女”は現れた、髪の毛はショートカットになっていて中学の時とは雰囲気が変わっていたが、身長の高さですぐにわかった。

ほんとに会えた、何か心の中で運命という物を感じた気がした、少しでも話したいそう思ってしまった俺は思わず「小島！」と呼んでしまった。

彼女はビクツとしてこちらを振り向いた、やっぱり変わらず彼女は綺麗で夏の日射しを浴びて眩しそうにしている顔はとても可愛かった。

彼女は手の仕草で、煙草吸っちゃダメでしょ捨てなさい、と言った。慌てて煙草を足元に落とし踵で踏み潰した、小島笑っていた、多分

素直に消したからだろう。

「何してんの？」

君に会える気がしてここにいたんだ、なんて言える筈もなく「ここでこいつと話してたんだ。」と答えた。

それから中学の話をし、今の話しをした。

1時間ほど話していただろう、菅と解散したあとポケットに入れてあった音楽機器をとりイヤホンを服の下から耳まで引っ張った、しかし音楽は頭にはいつてこず、周りの音がシャットアウトされた無音の世界でただ彼女に会えた喜びを噛み締めていた。

真人から連絡先を聞いたのはそれからすぐしてからだった。

彼女は突然の映画の誘いも快くOKしてくれた、あの時は思わず飛び上がったしまうほど嬉しかった。

7月22日、10:00に起床した。いつもと違う心地よい目覚めそれは多分心の状態から来ている物だろうと晴也は思った。

急がなくていいのに急いで仕度をし、待ち合わせの時間までテレビドラマをぼーっと見ながら時間を潰した。

そろそろいくかと一息つき、履きの悪い靴を手に取り指を靴べら代わりに靴をはいた、自転車にまたがり、ゆっくりとペダルを回した。彼女の家は自転車で10分程度の所であり、ゆっくりこいだのは待ち合わせ時間まで20分あるためであった。

無事彼女と合流し、映画を見た。内容なんてほとんど覚えてなく、とにかく彼女という時間が楽しかった、多分一日中しどろもどろだっただろう、ただ彼女が可愛いといった熊のぬいぐるみをクレイゲームで取れたのは自分を褒めてあげる雄一の部分だった。

「今日楽しかった、熊ありがとう。」

「小島っ、あのさデイズ二ー行こうって話したじゃん……」

そうだ今はチャンスだ、多少早いにせよもうこんな時間は中々やっ

てこない、今こそ告白するべきだ、彼女はデイズニーの誘いも行くと言ってくれたのだ。

「あのさ…」

言葉がつまる、頭の中にある気持ちは四方八方に

飛び回り整理する事は不可能に近い状態だった、あのさを連発し長い間彼女は晴也から言葉がでるのを待っていた。

「デイズニー行くのそれ俺の彼女として行ってくんないか。」

ああ言ってしまった、なんだこの台詞、顔が赤面し胸から沸き出る熱により周りの温度を感じれなくなっていた。

「はい。」

彼女は即答だった。それゆえ思わず「えっ？」と聞き返してしまっ

た。彼女はもう一度「はい。」と答えた。

これが市川晴也と小島千春の二人の恋愛始まりだった。

今思い返すと沢山の場所にいき沢山の思い出をつくった、デイズニーに行き長々アトラクションを待ち、ユネサンにいき雨のなか外の風呂にはいった、東京に行つて歩いて東京タワーをのぼり、建設中のスカイツリーに感動し、夜にホテルでホラー映画を見た、まだまだ切りがないこのたった4ヶ月の中にどれ程の軌跡を残しただろうか、楽しい思い出が心に突き刺さり、涙かれ、生きる理由もわからなくなるほど悲しむなんて、幸せだったあの時の俺は考えもしなかつただろう。

思い返せば、あの日俺は千春とのメールが切れ不安になっていた、バイトだろうと言い聞かせたが、二人の予定の手帳にはバイトの記しはなかった、不安になるというのも今までそんなことはなかったからである、一日中不安にとらわれ、バイトの終わる頃だろう時間にいつもの場所にいったが千春が現れる事はなかった。

22:30、電話がなった、千春からだ。

「もしもし…」

晴也は苛立ちを隠せずに怒った口調で言った。

「ごめんね、友達の相談受けてて」

「こんな長い間友達の相談受けてたんなら、メールで一通ぐらいそ
う言ってくれればいいだろ！！迎えに来た意味ねえよ。」

千春は黙っていた。

「わかったもう帰るわ。」

「えっ今どこにいるの？」

千春の家の下にいたが、なんか言うのがいやだった。

「お前んちの近く」

「行くからまって。」

千春はすぐに玄関から出てきて、エレベーターで上がってくる晴也
を待っていた。

千春終止黙っていた、晴也はもう俺のこと好きじゃないんだなと悟
った。

「ほんとに友達の相談のつてたの、俺の話してたんじゃないのか
よ。」

晴也はきつと先の見えない自分と付き合っていく自信がないぐらい
に友達に話しを聞いてもらっていたのだろうと思った、千春は黙っ
たままだった。

「俺の事もう好きじゃないんだべ？」

今にも噴き出しそうな涙をこらえ、かすれたこえで聞いた。

千春は首を横に振り「学校のテストが終わるまで待つてほしい。」
と言った。

「何を待つつの？別れるか別れないか？」

今度は首を縦に振った。

もう耐えられなかった、左手の薬指についでいたペアリングを外し
千春に握らせ、無理矢理つくった笑顔で「千春は俺じゃダメだよ、
バイバイ。」といって彼女に背を向けエレベーターを降りた。

下につき、彼女の方を見上げると悲しそうに頭を下に向けゆっくり

と自分の家にもどっていった。

何も考えたくない、もうなにもかもどうでもいい、晴也は半月の光に照されカッコつけて千春の言葉から逃げた自分を攻め続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1658ba/>

青い心

2012年1月4日06時49分発行